松本深志神社蔵奉納連歌　翻刻と解題

速水香織

キーワード：奉納連歌、小笠原氏、河辺家、松本

長野県松本市に鎮座する深志神社は、建御名方命（宮村宮）並びに菅原道真公（天満宮）を祭神として、その二柱の神をそれぞれ独立した本殿に祀る、神社本庁別表神社である(1)。南北朝時代初めにおいて宮村宮が鎮座、その後江戸時代に入ってすぐ天満宮が現在の地に遷座して以来、歴代の松本藩主および地元の崇敬を集めてきた同社には、複数回にわたって連歌を中心とする諸文芸が奉納され、現在もその一部が伝存する。本稿では、同社所蔵の奉納連歌の全文を紹介し、そのうち松本藩主小笠原家によると伝える連歌の奉納目的について若干の考察を加えたい。

深志神社の歴史は、信濃国の国司であった小笠原貞宗が暦応二（一三三九）年、上諏訪宮の祭神である建御名方命を現松本市内の庄内地域に勧請し「宮村大明神」と称したことに始まる(2)。一方で応永九（一四〇二）年、貞宗の孫にあたる長基が、居城を構えた井川にほど近い鎌田に北野天満宮を勧請(3)、さらに長享三（一四八九）年、清宗の子長朝は、居館を井川から里山辺に移転、以後天正年間まで小笠原氏は里山辺の林城を本拠地とした(4)。

その後、松本は武田氏の支配地域となるが、天正十（一五八二）年に武田氏が織田氏に滅ぼされた結果、再び小笠原氏による支配となる。同十八年には小笠原氏に代わって石川数正が松本に入り、現在の松本城となる城郭の整備・城下町の形成に着手している。そして石川氏が慶長十八（一六一三）年に改易となったのち、もう一度小笠原氏が松本に戻ることとなった。この時の当主であった小笠原秀政は徳川家康に重んじられ、秀忠の長女福姫を娶り、福姫との間に設けた長男は、秀忠の一字を賜り「忠脩」を名乗っている。

さらに慶長十九年、秀政は、当時鎌田に鎮座していた天神を、宮村大明神が鎮座する社地に遷座して八月二十五日に遷宮を挙行、門前には「天神馬場」と呼ばれる馬場を備え、宮村大明神は、ほぼ現在の深志神社に通じる姿に整っていたようである(5)。

しかし翌慶長二十年、秀政は嫡子であった忠脩と共に、大坂夏の陣に参戦、そして両名とも討死することとなる。次男忠真(6)も、本来参戦が認められていなかったにもかかわらず駆け付け、奮戦の末に七箇所の鑓傷を負ったと伝える(7)。幸い、忠真は一命を取り留めた。同年七月十七日には家督を継ぐことが許され、松本領八万石も安堵された。そして、その約三か月後の十月初旬、宮村大明神に連歌が奉納されたのである。

深志神社蔵奉納連歌は、奉納されたうちの一部が現存する状態と

なっている。内訳は、元和元（一六一五）年に奉納された千句連歌の半数（【A】―【E】）と、鎮座地である宮村（現松本市深志）庄屋であった河辺家をはじめ近隣の南深志庄屋連中による寛文十二（一六七二）年奉納の俳諧連歌ならびに歌仙一巻（【F】【G】）。これらは現在、一括して奉納箱に納められているが、この箱は数度にわたり作り直されたものであるらしい。元和元年奉納の千句連歌を納めていた箱は、現在はその蓋が残るのみとなっている（箱蓋①）。これとは別に延宝三年の書付を持つ箱蓋があり（箱蓋②）、さらに昭和七年に至り、中町年番により箱が作られ、現在は①②蓋を含むすべてがそこに納められている(8)。

連歌【A】―【E】は、もと百韻十巻の千句が奉納されたと考えられるものであるが、現在は「第四」「第五」「第八」「第九」「第十」のみが伝わる。「第一」から「第三」が伝わらないので不明な点が多いものの、元和元年十月三日から五日にかけて興行が催されたものであろう。連衆は、資治・宗吉・基直・仙長・守一・真柄・心也・道焉・母儀・お姫が現存分の全てに出座、加えて「第八」を除く四巻に幸松、「第四」「第九」「第十」に朝信、「第八」「第九」に清君が出座している(9)。

本連歌には奉納識語等は確認されないものの、注目したいのは連衆にある幸松の存在である。これは大坂夏の陣において討死した忠脩の長男に生まれた小笠原長次の幼名にあたるが、誕生は忠脩討死直後のことであり、連歌奉納時点では、生後一年にも満たなかった。「幸松」の名で詠まれた句は、別人物の代作ということになろうが(10)、この幸松を中心にすると、「母儀」は幸松の母・本多忠政女亀姫であり、「お姫」は幸松の姉にあたる女子繁姫であると考えられる。すなわち、忠脩家の生後程ない長男も含めた遺族が出座して、連歌の奉納が行われたことになる。

「幸松」は祖父秀政と父忠脩の幼名でもあり、小笠原氏当主となる人物が名乗る名と位置づけることができるものであった(11)。また先に述べたように、同年七月には忠真が小笠原家当主とはなっていたとはいえ、その時点では、忠真は、自らをいわば中継ぎの当主として位置づけ、幸松が成長したのちに家督を譲ろうとしていたらしい。この状況から、元和元年の連歌は、幸松の祖父にあたる秀政と父・忠脩の追善を目的として、忠脩の遺族により奉納されたものと位置付けることが適当ではないかと思われる(12)。

また、深志神社奉納連歌は、同地庄屋であった河辺氏によりまとまったかたちで書写され、現在、松本市文書館河辺義正家文書として伝来する(13)。同社に現存する【A】―【G】もここに含まれ、その巻頭に「御城主小笠原家より／宮村天満宮江御奉納連歌」と記されている。鎮座地である宮村の庄屋を務め、同社とも係わり深かった河辺家には、この千句連歌が小笠原家から奉納されたことが知られていたのであろう。

小笠原家は、元和三年播磨国明石に転封となり、以後松本藩主は、短期間のうちに数度の変遷を経る(14)。一方この時期には、松本地域における連歌文化は各地の庄屋にまで浸透しており、深志神社には、鎮座地の宮村庄屋であった河辺家が中心となったと思しき法楽俳諧連歌・歌仙が伝存する。河辺氏ら庄屋連中による法楽連歌は、松本市文書館河辺義正家文書として伝来するものも存在し、深志神社伝来分とは密接な関係にあると考えられる(15)。

（1）　現在、長野県松本市深志に鎮座。昭和三（一九二八）年、

県社となり、同四十一年に別表神社となる。

（2）「宮村両社縁起書上控」（松本市文書館蔵河辺義正家文書386）。

（3）注（2）に同じ。

（4）宮脇昌三氏「信濃国における連歌事象について（二）―中世より近世へ―」（『信濃』第7号、一九七一）には「江戸時代初期慶長中期の松本入山辺の桐原城の古図に連歌屋敷なる記入がある」旨が報告される。地域の伝承では、小笠原家臣の桐原氏が嘉歴年間（一三二六―九）に天満宮を勧請したとされ、宮脇氏報告の連歌屋敷は同氏と関連するか。なお同地区には現在も天満神社が鎮座する。

（5）「宮村両社縁起書上控」）。鎌田の天満天神社跡地には信濃史談会が大正五年に建立した「鎌田菅公廟址碑」が存在する。天神が宮村に遷座して後も同地には社殿が残され信仰の対象となっていたらしい。それが明治の神社合祀により更地となった後に碑が建立されたと伝わる。当地に鎮座していた天神が宮村に遷座したことは享保十九年成立『信府統記』にも記録されており、現松本地域においては、当時よく知られた出来事であった。また、天神馬場については、現存していないものの、嘉永二年刊『善光寺通名所図会』にも特筆されるなど、長期に亘って存在していた様子が伺える。

（6）慶長元年生～寛文三年没。七十二歳。元和元年時点では「忠政」を名乗っているが、本稿では「忠真」に統一する。

（7）『寛政重修諸家譜』巻第百八十八。家康は忠真を極めて高く評価し「これわが鬼孫なり」と称えたという逸話が『寛政重修諸家譜』に伝わる。

（8）箱蓋②に記される「延宝三年三月」は、当時の松本藩主であった水野忠直が深志神社に連歌を奉納した時点であり（注14参照）、箱蓋②はその際の奉納箱の蓋が遺されたものと思しい。また、深志神社は毎年七月に例大祭を挙行しており、現在の連歌を納める箱は、昭和七年の例大祭にあわせて奉納されたものと考えられる。しかしこの奉納箱には、同社宮司の牟禮仁氏のご教示によると、もと小笠原家から奉納された、秀政所用と伝わる鐙が納められていた。平成十四年に御正忌千百年記念事業の一環として本殿が改修された際、別置されていた連歌を戻す折、この箱に納めたとのことである。秀政所用の鐙は、平成二十一年に松本市文化財に指定、現在も同社に保管される。

（9）他の連歌に名を寄せる連衆は、小笠原家の家臣団である可能性が高いと思われるが、詳細は不明。忠真は大坂夏の陣後、京都に留まっていたが、七月二十日に松本に帰参を許されており、癒えきっていない負傷を家康より労われている（『寛政重修諸家譜』）。十月時点では松本にいたことになるが、連歌興行にどの程度係わっていたかは不明。

（10）例えば「西国出陣千句（羽柴千句）」第十百韻の秀吉発句が里村紹巴の代作であるなど、連歌における代作は珍しいことではないという。深志神社奉納連歌が祖父・父の追善目的であったと考えるならば、連衆として幸松の名を連ねることが求められたことは納得できるものであろう。

（11）忠真は幸松に家督を譲りたいと申し出るも、許されなかった旨が『寛政重修諸家譜』に載る。後に、小笠原氏は忠真の子忠雄が継ぎ、幸松は、長じたのち龍野藩主となった。ま

た、亀姫は忠真と再婚している（『寛政重修諸家譜』）。

(12) 第十「賦一字露顕連歌」の発句「天の戸の明方近し星の声」は母儀が詠み、脇「春待てさく庭の梅かえ」を幸松がつけている。また、千句の巻尾にあたる挙句「越て幾千代たのしかる年」も幸松の詠となっている。

(13) 請求記号「615」。外題に「宮村天満宮奉納連歌写／河邊氏」とあり、折紙四十八枚（縦一五・三×横三九・〇糎）を仮綴じにする。【A】～【E】を筆頭に、【F】【G】および現在は深志神社には伝わらない連歌等を記録する。同資料は、元禄十五年の天満宮八百年忌にあたって河辺盛勝が詠んだ和歌を最後とすることから、同年をあまり下らない時期に書写されたものと思われるが、この時点で「第一―三」「第六・七」はすでに所在不明となっていたと思われる。

(14) 小笠原氏転封の後、松本藩主は約三十年のうちに戸田氏、松平氏、堀田氏、水野氏と入れ替わって行く。水野氏に至り、ようやく定着するも享保十年には再び戸田氏が再び藩主となり、幕末に至る。なお、水野氏時代の藩主・忠直も現深志神社に連歌を奉納しており、その写しが河辺義正文書（615）に存在する。

(15) 河辺家文書の連歌資料には、本稿で紹介した伝小笠原家奉納連歌の書写（元禄十五年写）および現在は深志神社に所蔵されない同社奉納連歌の書写が含まれており、河辺家当主が深志神社への奉納品に直接触れることが可能であったことを示す。また、松本藩主による法楽連歌として、小笠原氏とは別に水野忠直による連歌の書写資料も存在する（付属資料の箱蓋②は、その折に作成されたと思しい）。河辺義正家文書の連歌資料は、藩主家と深志神社、そして庄屋との関係を考える上で極めて興味深い資料群であると言える。【F・G】はこの連歌資料群とあわせて考えることが望ましいと思われるため、これについては稿を改めて論じたい。

資料一覧

○伝小笠原家奉納

【A】「元和元年拾月四日／第四／賦薄何連歌」
　懐紙折紙綴じ。四枚。縦一八・七×五三・五糎。

【B】「元和元年拾月四日／第五／賦朝何連歌」
　懐紙、折紙綴じ。四枚。縦一八・七×五三・五糎。

【C】「元和元年十月五日／第八／賦何木連歌」
　懐紙、折紙綴じ。四枚。縦一八・七×五三・四糎。

【D】「元和元年拾月五日／第九／賦御何連歌」
　懐紙、折紙綴じ。四枚。縦一八・七×五三・三糎。

【E】「元和元年拾月五日／第十／賦一字露顕連歌」
　懐紙、折紙綴じ。四枚。縦一八・七×五三・五糎。

○河辺家等庄屋連中奉納

【F】「寛文十二年子十一月十五日／夢想之誹諧」
　懐紙、折紙綴じ。四枚。縦一八・五×五〇・〇糎。

【G―1】「寛文拾二年子十一月十五日／賦何宝誹諧連歌」

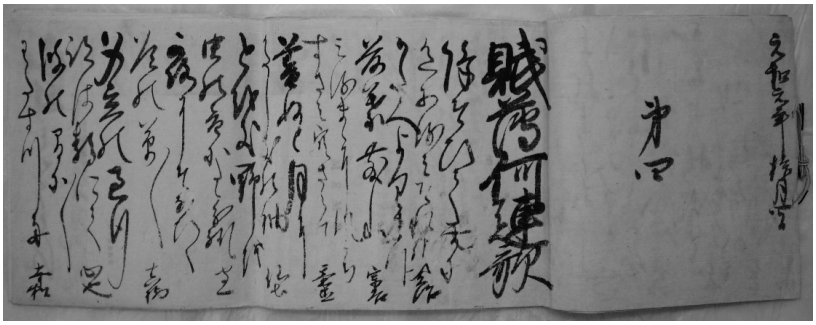
【G―2】「寛文拾弐年十一月十五日／賦何人連歌」
　懐紙、折紙綴じ。六枚。縦一八・一×五一・〇糎。鳥子紙。

○付属資料

・箱
　桐製。上下桟蓋（上桟は失われている）。

幅二二・六×奥行三〇・三×高さ二一・六糎。
箱書（表）「縣社深志神社」（裏）「昭和七年七月／小笠原兵部大輔秀政公／元和戦役戦死遊サル／中町年番調之」。
箱蓋二枚を収納。①桐製。縦三枚に割れた状態で伝来。縦二一・一×横（現寸約）一七・五糎。「元和元年／奉納連歌／拾月四日」。②桐製。縦二二・九×横二一・一糎。「しなのゝ国筑摩郡宮村／奉納　天神れん歌／ゑん宝三〈きのと／卯〉年三月日」。
・妙法蓮華経（三綴）。

【図版】第四「賦薄何連歌」巻首



奉納箱蓋

②

①

奉納箱

翻刻

・本資料は、深志神社蔵奉納連歌の全文を翻刻したものである。
・漢字は原則として現行通用の字体を用いた。
・一句のうち、改行箇所は「／」で示した。

【A】

元和元年拾月四日

第四

賦薄何連歌

1 降そひて天に／色あるみそれ哉　資治
2 かたへよりまつ／落葉敷山　宗吉
3 みるまゝに風うち／すさみ空さえて　基直
4 暮ぬと月に／かたしきの袖　仙長
5 とをき野を／虫の音にたゝ分残し　守一
6 露にそなひく／道の草〳〵　真柄
7 夕立の過行／跡は新にて　心也
8 波の間に〳〵／わたす川舟　幸松（初オ終）
9 山近みをとす／斗の春の風　お姫
10 外面の梅も／咲初にけり　母儀
11 鶯の軒端を／さらす馴て来て　宗吉
12 かすむ籬は／そことしもなき　資治
13 いつしかにうつし／かへぬる園の内　仙長
14 生そひけりな／呉竹の影　基直
15 年〳〵もつもるを／まゝの外よはひ　真柄
16 寝覚さひしき／埋火のもと　守一
17 寒さをは猶こそ／いとへ月のかけ　道焉
18 よのよしあしは／たゝこゝろから　心也
19 住とてもいとま／やはある難波人　資治
20 春よ秋よと／なかめ来にけり　仙長
21 花残る檜原の／奥にわけ入て　基直
22 永日あかぬ／さかつきの友　真柄（初ウ終）
23 晴やらぬ霞の／内の雨そゝき　仙長
24 なひきそひぬる／園の竹の葉　守一
25 吹くるも袖に／おほゆる秋の風　心也
26 くれかゝる野に／露そみたるゝ　仙長
27 きくに猶そこと／斗の鹿のこゑ　道焉
28 明かたならし／月うすきかけ　朝信
29 釣舟はみちくる／しほにうかひ出　守一
30 行衛もしらぬ／とをき海原　心也
31 見るかうちに山／より山はうらかけて　資治
32 袖にふりくる／村雨の空　真柄
33 暮ぬとてまちならひ／けん人もなし　仙長
34 風をとつるゝ／君がねやの戸　道焉
35 問よるも奥もの／ふかき宮の内　宗吉
36 なかれのをとも／きよきやり水　守一（二オ終）
37 秋更て庭の／白菊うつろひぬ　基直
38 露は草葉に／をきこほしつゝ　仙長
39 日にそひてこゑ／よはりぬる待虫　心也
40 月もいまはた／明過にけん　宗吉
41 舟はたもよせくる／波にたゝよひぬ　守一
42 ほのかにみゆる／沖つ嶋山　真柄
43 うき雲は風の／行衛に立消て　資治
44 のこりてふしの／かけかすかなり　仙長

45 しはしたゝ空に／時雨の降とほり　基直
46 日かけさすなり／里のかた原　道焉
47 鳥ははた軒に／まちかく囀て　仙長
48 こすの外山は／霞こめつゝ　資治
49 こと木まて咲そへ／にたる花さかり　真柄
50 くるゝ弥生は／誰かおしまぬ　心也（二ウ終）
51 老て猶物の／哀はしるならひ　仙長
52 すしかへしつゝ／仏とのふる　宗吉
53 ことはにもをよはぬ／法はいかならん　心也
54 をのづからなる／駒のあしなみ　真柄
55 相坂のせきの／山路は今日越て　資治
56 いつかあふみと／かへりみる袖　仙長
57 きぬ〳〵はうらみ／なからもしたひわひ　心也
58 しのひ車そ／月にとゝろく　基直
59 人しつめ入へき／かたは身にしみて　宗吉
60 きりのまかひに／見えし俤　資治
61 花になを露さへ／そゝく朝ほらけ　仙長
62 やとりをさらす／てふは寝にけり　宗吉
63 春風はすさむ／ともなき道のへに　道焉
64 うちかたらへる／そてのやすらひ　守一（三オ終）
65 旅はたゝしるも／しらぬも伴なひて　資治
66 おき出にけり／かりふしの床　基直
67 あり明の残るも／さすかみしか夜に　真柄
68 待にほとゝき／過る一こゑ　仙長
69 村雨の露は／いつくに帰るらん　心也
70 かたへすゝしき／秋の初風　資治

71 なかれ行水に／柳の散うきて　宗吉
72 舟さす袖も／きりにうつろふ　基直
73 ことかたる信野は／いとゝ名残あれや　仙長
74 契しもはた／浅からぬ中　守一
75 誰もたた御幸の／庭にまちわりて　宗吉
76 まつりの日さへ／くれかゝりぬる　仙長
77 敷すつるくさの／むしろの跡見えぬ　守一
78 いなちの雲はおちき／そひつゝ　資治（三ウ終）
79 をく露に月さへ／つれて打みたれ　仙長
80 きくもきぬたの／音遥なり　基直
81 行〳〵も里はな／れなる道の末　道焉
82 なくはいつれそ／あやしけたもの　真柄
83 深山辺はこと／とふ人も稀にして　資治
84 静なるこそ／たゝ心なれ　仙長
85 をし鳥の波の／間にあそふらん　宗吉
86 岸根つたひの／水そこほれる　心也
87 せきわくる筧の／末はたえ〳〵に　資治
88 つくりすて田や／しける草村　真柄
89 あらたむる国の／さかひは里とをみ　心也
90 いつくの山そ／かゝる白雲　仙長
91 春としもあらぬは／谷の深雪にて　宗吉
92 うくひすとこそ／鳥もなくらん　真柄（四オ終）
93 年こへぬあやしや／袖の薄氷　仙長
94 またうちとけぬ／花のしたひも　心也
95 よりそふもおもはゆ／けなる新枕　資治
96 後のあしたや／おきうからまし　真柄

97　日をへつゝ末なを／とほし旅の空　道焉
98　暮ても山は／残る一坂　宗吉
99　瀧の音はたへ〳〵／としもきこえきて　守一
100　千里の外も／のとけかるらし　基直

資治　十四　お姫　一
宗吉　十二　母儀　一
基直　十　道焉　八
仙長　十九　朝信　一
守一　十
真柄　十二
心也　十二
幸松　一

（四オ終）

【B】
元和元年拾月四日
第五
賦朝何連歌

1　ならの葉に風さへ／そよく霰かな　基直
2　時雨しくるゝ／明ほのゝの空　真柄
3　雲かゝるとを／山の端に月消て　仙長
4　秋の野原に／わけまよひぬる　資治
5　誘引はれてかへさ／忘るゝ虫のこゑ　心也
6　道の行衛も／くれ初にける　守一
7　問よるもほかけを／さとのしるへにて　宗吉
8　袖あまたなる／あしふきのうち　母儀（初オ終）
9　風あらき浪にや／しはし泊舟　お姫
10　踏跡みゆる／真砂地の末　幸松
11　近くしも折／ゐてあさる鶴の声　真柄
12　玉こそわたせ／小田の朝霜　基直
13　住かふる庵は／山のかたかけて　資治
14　たちよるかたに／松の下かけ　仙長
15　暑をもさすか／忘るゝ風の音　守一
16　雨晴てなを／月のさやけさ　心也
17　一巻をみるも／心の露なさけ　道焉
18　いらまほしきは／たゝ法の門　宗吉
19　舟はたゝ湊に／近く打出て　基直
20　波間にうかふ／沖つ嶋山　資治
21　なかむれは家路／わするゝ花さかり　幸松
22　永日もはた／暮かゝるなり　真柄（初ウ終）
23　打つゝく袖も／霞の内にして　守一
24　になひもてゆく／市の家つと　宗吉
25　立留りよはふに／をそき渡舟　心也
26　はこふ真柴の／道やくるしき　資治
27　暮かゝる雪は／山路に降つもり　仙長
28　やとゝるかたも／そことしられす　基直
29　さしふきの庵りは／かこふかけもなし　真柄
30　あらしもさそな／松か根の床　仙長
31　更過る月に／枕をそはたてゝ　資治
32　うらみありける／さむしろの露　守一
33　かね事もあきに／成ぬる中はうし　宗吉
34　都を余所に／住はすまるゝ　道焉

35 をくれしと伴なひて／行たひの道　仙長
36 はてしもあらす／わくるむさしの　心也（二オ終）
37 乗駒もつかれし／まゝにをり立て　資治
38 やすらひつゝも／水むすふ袖　宗吉
39 涼しさは竹葉／そよく風の音　守一
40 入日も色に／なひく草村　仙長
41 暮るまて小鷹／狩つゝ月出て　真柄
42 かへるさに／なほ道そ露けき　基直
43 またもとてきかぬは／うらみ其いなせ　仙長
44 さはりあるほと／たのむ中たち　心也
45 引そへていのりも／ふかき御注連縄　守一
46 おくはしられぬ／杉村の陰　資治
47 かゝりけりいらか／たへ〳〵花の雲　仙長
48 外面に近き／鶯のこゑ　基直
49 消てたに深山は／雪ののこるらん　真柄
50 こほりなかるゝ／谷川の末　資治（二ウ終）
51 あとさきとくらす／筏の袖おほみ　心也
52 日は暮にける／遠近の空　宗吉
53 待えての今宵の／月に隈もなし　仙長
54 秋とちきりし／ことのはの末　真柄
55 手にふれて置も／扇はかたみなり　守一
56 くりかへしては／しのふいにしへ　心也
57 うきはたゝよはひ／たけての宮つかひ　資治
58 めくみはふかき／我君のかけ　仙長
59 生あふもけにさき／のよのえにしかは　心也
60 馴ぬる友そ／たのみありけり　宗吉

61 かふ鳥の庭に／あそふもむつましき　仙長
62 うつるひかりに／きゆる朝霜　守一
63 わけならす野辺の／千くさもかれ〳〵に　宗吉
64 はけしかりけり／そての夕かせ　資治（三オ終）
65 行舟も寄くる／浪にたゝよひて　心也
66 心つくしの旅／おもひやれ　仙長
67 かへりこん程も／遥けし松浦山　真柄
68 にし吹あきの／をとつれもいさ　宗吉
69 月に猶のこる／暑や忘るらん　資治
70 過るあまりの／はるゝ長き夜　心也
71 むかしとそしのふも／さすかはかなしや　仙長
72 面影はある／志賀の故郷　守一
73 誰うへし杉は／一木のしけりそひ　資治
74 にほひをはこふ／花の春風　心也
75 分て行山は／霞の立こもり　守一
76 雲にいつるも／をそき日のかけ　宗吉
77 雪ははたみちみえ／ぬまてふりつもり　仙長
78 むかふかゝみも／をしやりてをく　真柄（三ウ終）
79 老ぬれは面／かはりする我姿　心也
80 年経てあふは／ゆかりあやしむ　仙長
81 所からたひたる／声になれ〳〵て　資治
82 ことはりしけき／さけのさかもり　宗吉
83 おもふとち伴なふ／まゝに夜は更て　基直
84 月になりての／袖のかへるさ　守一
85 舟はなを秋はや／乗る浪の上　仙長
86 浦のとまやは／露もいとはす　心也

87 よしあしもなひき／そひたる風の音　真柄
88 をさまりけりな／さらぬ民の戸　仙長
89 かしこきは互の／をきてまなひ来て　宗吉
90 心のやみに／まよふ身はなに　心也
91 いとゝなを過ぬる／かたやおもふらん　資治
92 かれ〳〵になる／中の玉札　真柄（四オ終）
93 二道をかけし／契もかたつきて　守一
94 いつちとかよふ／さほしかのこゑ　仙長
95 秋はたゝ寝覚／かちなるかり枕　心也
96 結ひそへたる／そしろたの庵　真柄
97 行水のをとは／すゝしきかた〳〵に　宗吉
98 暮てみたるゝ／ほたるかす〳〵　資治
99 簾巻外面の／花はうつろひぬ　基直
100 風もみとりも／杉に立そふ　幸松

基直　八　心也　十五
真柄　十二　守一　十二
仙長　十九　宗吉　十三
母儀　一
お姫　一
幸松　三
道焉　二
資治　十五

（四ウ終）

【C】
元和元年十月五日

第八
賦何木連歌

1 前出て春待／庭の小草哉　仙長
2 月さへうつる／冬の池水　守一
3 ふくるやと雲ゐに／雁の声はして　宗吉
4 霧立こむる／山の遠かた　資治
5 行袖ももすそは／露に打しほれ　基直
6 ひろき野原は／分もつくさす　心也
7 小薄は茂るを／まゝになひきそひ　真柄
8 みるか内より／風そをちくる　道焉（初オ終）
9 俄にもとま引／かこふ湊舟　母儀
10 雪そかさなる／村雨の跡　お姫
11 越残す山路の／末はおほつかな　資治
12 けふりや里の／しるへ成らん　仙長
13 呉竹の生ふる／あたりはくらかれや　心也
14 明ぬる園に／すゝめあつまる　基直
15 をく霜も夜の／寒さや増るらん　道焉
16 雲も晴行／月のかもふし　真柄
17 秋風はいつしか／袖に吹をくり　宗吉
18 虫の音もはた／遠ざかりぬる　資治
19 わきてしも誰かは／とはん我すまゐ　仙長
20 雨には猶も／うきしはの庵　道焉
21 まつもたゝ花は／ほとゝき過ぬらん　守一
22 しはしやすらふ／相坂の関　心也（初ウ終）
23 又いつと結ふ／清水に袖しほれ　仙長
24 かへるさになる／野は遥なり　宗吉

25 草かりや夜を／かけつゝも遣けらし　資治
26 かたる声して／渡るかけ橋　真柄
27 月にけさ残れる／空は朝霧に　宗吉
28 置そひにたる／あさちふの露　仙長
29 我か袖に秋の／あはれを引結ひ　守一
30 つれなきかたに／尽す玉つさ　心也
31 しはしたゝ心かへ／するとしもかな　基直
32 おやのいさむる／えにしとはしれ　資治
33 名残ありと通ふ／まとのみ又やねん　仙長
34 いつちと分ぬ／山ほとゝきす　真柄
35 五月雨の空は／みる〳〵雲晴て　心也
36 やすらふかたは／あふち吹かけ　守一（二オ終）
37 暮渡る外面の／小田に風過て　仙長
38 せき分て行／水そぬるめる　基直
39 そことしもあらぬ／かたへに鳴かわす　宗吉
40 霞に移る／ひかけ静けし　守一
41 朝またき野原の／霜の打けふり　真柄
42 みとりにそよく／竹の一むら　仙長
43 暮ことにあつまり／にたるとり〳〵に　基直
44 やすらふまゝに／ま草かいつゝ　宗吉
45 道かけて猶急く／なり旅の空　道焉
46 をくるゝ成は／待としもなし　基直
47 よひかはす程も／ありけり川舟に　仙長
48 石にくたくる／よはのうき波　心也
49 花はたゝみ谷の／おくもはや咲て　基直
50 はふき出ぬる／うくひすのこゑ　真柄（二ウ終）

51 ふるとても袖に／たまらぬ春の雪　守一
52 かすか成ける／夕月のかけ　仙長
53 吹をくる嵐に／秋の雲きえて　心也
54 それかあらぬか／分ぬいなつま　宗吉
55 世の中のうきも／つらきも夢にして　仙長
56 よはひの程そ／おとろかれぬる　真柄
57 一筋にねかは／さらめや法の道　心也
58 朝（マヽ）ぬ暮ぬと／爪木とる袖　資治
59 よむ哥の心の／おくはふかかれや　清君
60 しのふの山も／いつ行てみん　仙長
61 うけ引ぬ人こそは／猶つれなけれ　真柄
62 たひ〳〵にしも／頼む中たち　心也
63 見るもたゝさはり／有ける文の内　資治
64 きえかたになる／ともし火のかけ　宗吉（三オ終）
65 あけ置て風吹／いるゝ窓のまへ　守一
66 茂りそひたる／庭のつき山　心也
67 なてしこに又／こと草もおひましり　仙長
68 緑なかむる野／こそひろけれ　真柄
69 分行も末や／霞のせきならん　宗吉
70 明かたならし／帰る雁かね　仙長
71 古郷の花も今／はたさかりかは　道焉
72 波さへ松に／かゝるうら藤　守一
73 引かこふ屏風の／えにしすみかれて　真柄
74 おくはあやしき／物こしの音　資治
75 ねたみあるは大かた／ならし人心　仙長
76 かみかけつゝも／契りしはなに　心也

77 かたしきの枕の／月の更〳〵て　守一
78 いてかてなれや／衣うつさと　資治（三ウ終）
79 旅人も秋寒なら／し北の国　仙長
80 ふりつもりたる／雪の山〳〵　道焉
81 ふくろうの暮れとて／近く竹に来て　心也
82 立ならひたる／松そ木深き　宗吉
83 やすらふもしはし／成ける夏の日に　資治
84 きしねの水そ／かたよりて行　仙長
85 つき置しつゝみの／末はくつれそひ　清君
86 遠きは里の／かよひまれなり　宗吉
87 そことしもつゝくは／ほそき山道に　仙長
88 玉と見えつる／にしはきえけり　真柄
89 夕立はたゝ一とほり／ふりきほひ　道焉
90 木すゑのからす／打むれて行　仙長
91 杉むらはいか成る／神のやしろかは　宗吉
92 ほのけき月に／見ゆるしらゆふ　心也（四オ終）
93 かすきぬも花に／ねかひのいとはへて　仙長
94 霧こめてたつ／袖はあやしも　道焉
95 小車は忍ふ／斗と見えけらし　宗吉
96 夕とゝろきは／わかむねの内　基直
97 なるかみの音さへ／あらし爰かしこ　真柄
98 雲こそうつめ／山の遠近　資治
99 すみかまのけふりは／風に打なひき　守一
100 かしこきかせに／すめる里人　心也

仙長　廿　お姫　一　守一　十　清君　二
宗吉　十三
資治　十一
基直　八
心也　十四
真柄　十二
道焉　八
母儀　一　（四ウ終）

【D】

元和元年拾月五日
第九
賦御何連歌

1 行年も実名残／ある今日の暮　お姫
2 雪にかゝくる／釣簾の外の山　仙長
3 有明の月は／砌に影更て　心也
4 かへるさになる／秋の伴なひ　真柄
5 わけ入も小鷹／狩野は広かれや　資治
6 日も暮かたの／鐘そきこゆる　基直
7 問よらんやとりは／近き村かけて　幸松
8 学にあかぬ／文の幾巻　道焉（初オ終）
9 涼しくも明行／夜半に飛蛍　宗吉
10 浪も友なる／池水の月　母儀
11 うき草は風の／間に〳〵かたよりて　仙長
12 ほそきなかれの／末遥なり　心也
13 伝へ来て妙ぬは／法のをしへかは　真柄

14 見てさひしきは／奥の古寺　守一
15 樒つむ山さへ／今は霜をきて　基直
16 踏はあやしき／組のかけはし　宗吉
17 虹はたゝかたへ／より先消ぬらん　資治
18 なひくをまゝの／風の白雲　仙長
19 見る〳〵もそらは／雪気になりけらし　心也
20 ひろふ薪の／道やいそかん　真柄
21 あけ過るかたより／花のかほり来て　守一
22 まくもすたれの／外面はつかし　基直（初ウ終）
23 指移る日影／求て飛小蟬　仙長
24 残るはうすき／風の雲霧　資治
25 幾度か時雨て／秋はかはるらん　宗吉
26 色つきにたる／遠の山〳〵　心也
27 ほのめくはまた／宵の間の月なれや　仙長
28 よしあしとたゝ／わけまよふ袖　真柄
29 しのひよるかたも／人目やしけからん　守一
30 あふときにしも／さはりこそあれ　清君
31 えにしあれと神に／めくみをいのらはや　心也
32 君と臣との／中はむつまし　仙長
33 とひよるもこころは／ふかき小野の奥　宗吉
34 炭やくけふり／空にきえぬる　資治
35 雪けにもはやなり／にける比にして　基直
36 身にこそつもれ／おくる年〳〵　真柄（二オ終）
37 消るとはきゝけん／罪を其まこと　仙長
38 誰かおもはぬ／わたる波岸　心也
39 世をはたゝのかれん／とのみあらましに　資治

40 さそなゆかりそ／うきほたしなる　仙長
41 故郷を出しと／斗ちきりをき　真柄
42 そはぬに今は／うらみもそある　守一
43 なのらぬも物の／けしきはあらはれて　宗吉
44 朝くら山の／秋の夕風　仙長
45 月にしもかゝれる／雲は消やせん　基直
46 をけはこほるゝ／草〳〵の露　資治
47 朝かほのいろも／垣ほにうつろひて　守一
48 きのふはけふと／かわりもて行　宗吉
49 花にみし姿も／今は老にけり　心也
50 うきかすまする／文ももらすな　仙長（二ウ終）
51 あた人はこひ路／のとむる隙もなし　仙長
52 ことはの末は／うつろひにけり　真柄
53 卯つき咲浪も／色ある遣水に　仙長
54 月さへ雪に／をつるをは嶋　宗吉
55 みるもたゝいとゝ／さひしき宮の内　資治
56 世を宇治とたに／誰いとひけん　仙長
57 住なれし都も／今は隔りて　心也
58 をとしつかにも／秋風そ吹　守一
59 松虫のなくは／蓬のもとならん　基直
60 みし面影を／身にしめるやと　宗吉
61 ひかふるもまつり／過ぬる小車に　仙長
62 春日の野辺の／袖のましわり　心也
63 つれつゝもつむは／したしきあさな〳〵　真柄
64 いくとし手のひ／引やかさねん　宗吉（三オ終）
65 老もさそいとはす／春や来にけらし　仙長

66 むかふかゝみの／かけはくもらぬ　資治
67 立寄てむすふ／清水の手をきよみ　心也
68 あかぬこゝろと／人もやはしる　仙長
69 衣〳〵の別より／待程はうし　宗吉
70 暮れは月に／うかれ出つゝ　資治
71 やゝさむみ寝／くらあらそふ友烏　真柄
72 霜さへつたふ／露の玉垣　仙長
73 呉竹は生そひ／にける陰ならん　守一
74 煙ほのかに／みゆる一むら　基直
75 藻塩汲潟分／行はうらさひし　宗吉
76 ひろふ貝ある／賤のあけまき　心也
77 敷かゝるゆふへの／花にまとゐして　真柄
78 さくらかりさへ／をしきかへるさ　仙長（三ウ終）
79 いとゝなを山は／霞の立籠て　仙長
80 雨にやならん／空のうき雲　清君
81 待もたゝ過に／けらしな郭公　宗吉
82 適（ママ）近にこそ／人はとひつれ　仙長
83 呑もはたあたゝめ／酒の数そひて　心也
84 はらふともなき／庭の紅葉は　道焉
85 をく露に移りて／月の影清し　守一
86 度々むすふ／暁の秋　仙長
87 長き夜も寝かて／にきくかねのこゑ　資治
88 夢かうつゝか／枕露けし　朝信
89 はかなくも世を／うき橋と渡来て　宗吉
90 よはひかたふく／身をいかゝせん　真柄
91 うつり行を花に／もさすかなくさまて　仙長

92 おく山すみは／春もわひしき　資治（四オ終）
93 消るあり消ぬも／雪は北南　宗吉
94 巣にふす／鳥も空さむき比　仙長
95 木からしのをとは／あらはに吹をちて　心也
96 引こそかこへ／草ふきの庵　守一
97 もりそへてなを／広かれや小田の末　真柄
98 ひやゝかなれや／なかれ行水　資治
99 舟をさす川瀬は／霧の立こめて　基直
100 やすらひつゝも／道のかへるさ　道焉

お姫　一　守一　九
仙長　廿一　清君　二
心也　十三　朝信　一
母儀　一
幸松　一
真柄　十二
資治　十四
基直　八
道焉　三
宗吉　十五　（四ウ終）

【E】
元和元年拾月五日
第十
賦一字露顕連歌
1　天の戸の明方／近し星の声　母儀

2 春待てさく／庭の梅かえ　幸松
3 なよ竹の末葉／かこよゐ雪散て　仙長
4 羽ふきいてこし／谷のうくひす　道焉
5 まつとけて水に／なかるゝ山川に　真柄
6 霞の内を／くたす筏師　心也
7 明ほのゝ月をや／頼む岩根水　お姫
8 をき乱したる／草〳〵の露　資治（初オ終）
9 分ならす野は／はた虫の声〳〵に　宗吉
10 をしむにもたゝ／暮て行秋　守一
11 気色さへ冬めく／空の移来て　朝信
12 朝かゝみさへ／うきまゆの霜　仙長
13 くすり子の向ふも／さそなはつかしみ　道焉
14 いくめくりかは／かすみくむ袖　真柄
15 端居するかたは／光りも長閑にて　基直
16 一木の花の／さかり成いろ　宗吉
17 雨や唯ふりすこし／たる比ならむ　資治
18 いつち過行／山ほとゝきす　道焉
19 かりにたに結ふ／枕をそは立て　心也
20 月さへもたゝ／やとるさむしろ　仙長
21 問れぬを恨みて／かりる袖の露　真柄
22 秋とはいつか／ちきり置きけん　守一（初ウ終）
23 夏草の陰に／鹿子はたゝすみて　仙長
24 ねらひすてゝや／帰る狩人　基直
25 行方をみれは／雪気の空なれや　道焉
26 分残したる／岡越の道　資治
27 橋は唯みなきる／水の浪掛て　宗吉

28 こゝろならすの／旅のやすらひ　心也
29 晴るともなかめは／今日の暮行て　仙長
30 かへるさしたふ／もろ人の袖　資治
31 名残あれとさし／かはしぬるさかつきに　真柄
32 鳥〳〵うたふ／こゑそきこへる　基直
33 門田をはかたへより／まつうへ渡し　仙長
34 分〳〵てやる／水のすゑ〳〵　宗吉
35 移りぬる月は／雪まに秋さむみ　基直
36 露はかけても／しのふきぬ〳〵　仙長（二オ終）
37 言の葉も身にしむ／中はつゝみわひ　資治
38 人やとかめん／かほるたきもの　守一
39 つま琴の名も／むつましと立うかれ　仙長
40 明すくるまて／ふく笛の声　真柄
41 幾度も袖をや／かへすさ夜神楽　宗吉
42 ふりそへけらし／あかつきの霜　仙長
43 鐘は唯まくらに／近く音消て　道焉
44 したひしたふや／今朝のわかれ路　資治
45 都出て関まてと／こそ送りけめ　仙長
46 まきかへしては／続文の内　心也
47 つれつゝも行や／せましの遠島に　真柄
48 いつ聞すてん／松山の声　宗吉
49 大内の花に／こと葉の色もなし　仙長
50 かすむる月に／しらふ四ツの緒　心也（二ウ終）
51 永日も暮るは／うちととひ寄て　真柄
52 人たかへこそ／うきちきりなれ　仙長
53 二道は誰かなす／わさとうらみわひ　心也

54 絶えにし見へは／たのまんもなに　資治
55 うき世とはしりても／迷ふ我か心　仙長
56 分〳〵て行／竹の下陰　真柄
57 くものゐ(ママ)はは数／まゝに掛添て　心也
58 かこふ垣ほそ／哀かたふく　守一
59 稀にとふも人／こそ見えね草の庵　仙長
60 ふむあとのある／霜のかけはし　宗吉
61 一坂を越ても／とをき奥の寺　真柄
62 暮ぬとひゝく／いりあひのかね　資治
63 月にはと心もむかふ／にしのそら　仙長
64 をしへの外の／道はしられす　心也（三オ終）
65 茂り逢ふ夏野／の原を分兼て　宗吉
66 村雨すくる／袖そ露けき　基直
67 またしとは思ふ／人しもあやにくに　仙長
68 ねられぬ床も／明はてにけり　真柄
69 埋火はうきふし／しけきまくらにて　宗吉
70 くりかへしつゝ／忍ふいにしへ　仙長
71 したしきもいつその／程の遠さかり　資治
72 ひとりなかむる／夕くれの月　道焉
73 もる露も都に／しりぬとまやかた　仙長
74 薄きり分る／すまのうら舟　真柄
75 うつし絵はをよ／はぬ筆のなかめかは　心也
76 あはせてそしる／うたのしな〳〵　宗吉
77 かふはしみ心の／花のあらはれて　真柄
78 あかぬはいとゝ／さくらさくかけ　守一（三ウ終）
79 いつちとか帰り／つくせる鳥の声　資治

80 みたにかくれは／かすみこめつゝ　仙長
81 草ふきの庵りに／かよふ人もなし　真柄
82 ふり暮したる／なか雨のそら　資治
83 崩そふ小田の／堤は水越て　道焉
84 色にかたよる／波のうき草　仙長
85 秋までも残るほたるは／かそかなり　真柄
86 風にやむすふ／露はみたるゝ　宗吉
87 くれ竹のすゑ葉の／月も明はなれ　資治
88 上てすゝしき／まとの玉たれ　心也
89 わきて誰と／あやしかりける衣の音　仙長
90 たく香はもれて／袖にうつろふ　真柄
91 たえすおもふこゝろの／ほとはいひ出ぬ　守一
92 うらみすもたゝ／しる人そしる　宗吉（四オ終）
93 かしこきや治れる／世を待ぬらむ　仙長
94 山より奥の／栖求むる　資治
95 とめいるは伏猪の／通ふやとみえて　守一
96 野原を広み／ふれるうす雪　道焉
97 冬枯の萩も／すゝきもなひきあひ　基直
98 花はまたしき／春の明かた　真也(ママ)
99 なれつゝも結ふは／清き若水に　宗吉
100 越て幾千代／たのしかる年　幸松

母儀　一　守一　一七
幸松　二　朝信　一
仙長　廿二　基直　六
道焉　八　資治　十四

真柄　十五
心也　十
お姫　一
宗吉　十三

（四ウ終）

【F】

寛文十二年子十一月十五日
夢想之誹諧

1　砂金を盆に／一はい不求来米
2　つもる宝の／玉あられ酒
3　よろこひに悦や／待春ならん
4　天のめくみの／ほとは深しも
5　哥の品えならぬ／様によみなして
6　おもひのまゝに／叶ふ雨乞
7　草木の色は／うるほふ月の影
8　詠め奥ある／秋の眺望
9　初潮の差引／跡はいつくしま
10　鳥井は浪に／見つつかくれつ
11　大船は風に／ゆりあけゆりおろし
12　すはあらはれて／いつる怨霊
13　なやまれし色は／あふひの上つ方
14　うらみたゝ〳〵／いひてはるけん
15　契約の是ほと／までに違はめや
16　またくり返し／見る状の中
17　月寒き夜半に／火燵の火は消ぬ
18　猫はいつちへ／にけていぬめり

御

（初オ終）

19　咲花に舞は／うるさき蝶〳〵し
20　一かすみある／薗の菜畑
21　外より見て長閑なる／居なしにて
22　ひゝきわたれる／つりかねの音
23　子の行衛尋ね／こゝろのみたれ髪
24　あの人〳〵は／何を笑ふそ
25　怪我はたゝ誰か／身の上もはかられす
26　おもひの外に／したる高名
27　俄にもおつへき／城としらさりき
28　一度にとつと／わたるかりかね
29　海上を吹まくり／たる秋の風
30　波間の月は／ういつしつみつ
31　猿猴は夜も長／〳〵と手を出し
32　しはし案する／みたれ碁の躰
33　斧の柄はいつの／間にやら朽果て
34　それかあらぬか／道風の草
35　幾年も古にし／寺の額の文字
36　あふのきて見る／清水のいん
37　さら〳〵となるは／音羽の瀧の水
38　絶すとうたり／またうたふたり
39　面白し弐三番／三の翁たち
40　咲みたれたる／前栽の菊
41　さら〳〵と風に／こほるゝ露の玉
42　をしわけて行／月の下みち
43　いとしきにかよふ／心のいかはかり
44　文のたよりも／なさけない事

（初ウ終）

（二オ終）

45 おもわれし中は／今只捨小舩
46 いつ御赦免の／あらん遠嶋
47 朝暮に古郷の／空を詠やり
48 かこをひらひて／逃す飼鳥
49 無かため法事／つとむる花の春
50 たれもしたふや／美しの我
51 糸ゆふにやさしき／すかた様をかへ
52 小野のすまひは／なみたたら〳〵
53 百とせの姥も／むかしを思ひ出し
54 よみぬる哥の／あわれ至極さ
55 臨終に及ふ／こゝろは正しくて
56 あらたにおかむ／弥陀の来迎
57 信仰はいふに／詞もたえま寺
58 月を三笠の／山は殊勝や
59 すつきりと霧／はれわたる天の原
60 きら〳〵とする／露の白玉
61 まき絵には秋の／色〳〵草つくし
62 入江にうほは／きつとよりけり
63 釣の舟のりこそり／たる難波かた
64 ひたふりにふる雨は止候
65 漸〳〵と神の／いかりもしつまりて
66 よそめくるひは／ふつととまりぬ
67 あためくはうき名は／はつと立田山
68 ひとり寝はたゝ／さむしろの上
69 待〳〵て来ぬ／夜は月に恨侘
70 おきし形見の／扇曲なや

（二ウ終）

（三オ終）

71 うつくしき脇／秋風の舞の袖
72 下戸も一はい／更るさかつき
73 おもはさる打身の／痛さいかはかり
74 いまたならひの／うとき言法
75 さきもしらす行里／とひし若兎
76 のほり坂こそ／達者なりけり
77 散し跡たつね／〳〵てみねの花
78 谷に木玉も／ひ〳〵く鶯
79 雪は今すらりと／消る四方の空
80 次第〳〵に／まさる水かさ
81 伐置し数の／材木なかさまし
82 爰もかしこも／宮の建立
83 みたれたる世は／太平に治りて
84 くはらり〳〵と／ひらく関の戸
85 たんやくのしるしは／けにもたゝならす
86 草の葉舟に／露おきな丸
87 色〳〵になく／むしの音は面白や
88 月にうそ〳〵／ありく秋の夜
89 誰もかもすまふ／このめり若さかり
90 いつれおとらぬ／獅子のよりあひ
91 ほり物の手きは／すくるゝ目ぬきにて
92 風味ことなる／このふなのすし
93 近江路に拠りし／旅はいまむかし
94 遊山を志賀の／浦〳〵の景
95 いにしへの都の／跡をなかめやり
96 平安城に／さたまりてけり

（三ウ終）

（四オ終）

97 ぬけは玉ちらす／はかりの刀にて
98 いかて悪魔は／おそれさるへき
99 御神の恵みは／深き花の袖
100 知行得方に納置金

諸願成就皆令満足

西川小兵衛
安積（四ウ終）

【G―1】
寛文拾弐年子十一月十五日
賦何宝誹諧連歌

1 神の威も益〳〵／君かたい神楽　昌宣
2 ぬさとり〳〵に／くむあられ酒　讃清
3 晴渡る日和も／よしと旅立て　安積
4 気もうきやうに／乗ふねの中　森信
5 ほと遠し雲井や／浪のまかひもの　俊行
6 さら〳〵とくる／瀧のしらいと　正次
7 伴ひて月もて／はやす題の詩に　延貞
8 ひきぬる琴は／音色身にしむ　正俊（初オ終）
9 秋風にすわ〳〵／松の宿かして　盛氏
10 そつとはかりの／村雨のあと　正好
11 鳴をきけ暮ての／空の郭公　勝興
12 一首つらぬる／哥そえならぬ　執筆
13 つれなきも思ひの／外になひきあひ
14 祈る初瀬の／誓ひたうとや
15 美目あしき姿も／いまは能なりて
16 月しろ〳〵と／けわふおしろい
17 心にもあらてあたなは／たつあきに
18 すまぬうき世や／いやな露の身
19 後生をもしらて／くらすはおろかなり
20 すきわふ業は／からきめはかりそ
21 うらやまし人は／美丶敷花の袖
22 安堵の状を／ひらく鑓梅　（初ウ終）
23 折を得てかすまぬ／罪を申わけ
24 おもひしらるゝ／信心のほと
25 来迎を拝むは／かんにたえま寺
26 天狗のなせる／わさはあやしも
27 俄にも越路の／勢は催され
28 積しゆきを／さつとわけゆく
29 大きなる石は／峯よりこけ落て
30 あちらこちらへ／とひ猿の声
31 ちら〳〵と水に／うつろふ月の影
32 初塩になふ／田子の浦人
33 ひや〳〵と袖に／吹くる冨士颪
34 いつしかつかひ／いれんあら鷹
35 殺生のむくひの／ほとやしらさらん
36 くり返し見よ／経のまき〳〵　（二オ終）
37 渡りくる数の／黒舟つなかせて
38 難波ほり江の／にき〳〵とする
39 かけ直すむかし／なからの橋柱
40 やかて御幸の／あらんとりさた

41 空焼を厠〳〵に／くゆらかし
42 こゝろうか〳〵／まへわたりせり
43 文ひとつやらん／たよりも涙川
44 古郷をさりて／すむはなれ嶋
45 月涼しかならす／世にはいつの国
46 爰にかしこに／多き竹の子
47 孝行は天の／恵みや深からむ
48 大事をならひ／得たる筆勢
49 枝をため指置て／見る床の花
50 囀る鳥は見えつ／かくれつ
51 しは〳〵も休て／息を継尾鷹
52 行や片野の／はらもへるらし
53 いつの間に誰か／畠を起し添
54 守護よきかたへ／つとひよる袖
55 御情は他国まて／ありふれて
56 いさ聟兼を／三好野、さと
57 縁辺はたのむ／はかりのこゑすなり
58 したゝめておく／露の玉章
59 いとせめてもの／おもわする月のかほ
60 ふりあふのきて／またみかさ山
61 奈良酒や数をも／しらす汲かはし
62 さらは〳〵の／馬のはなむけ
63 行道は南の／かたをこゝろかけ
64 逃のひはせし／とめよ落人
65 戦は今度／志賀津に陣取て
66 其功により／給ふ恩賞

（二ウ終）

（三オ終）

67 よろこひは踊を／かけつかへされつ
68 月に責ぬる／はやあしの馬
69 住吉やとよめき／渡る市の場
70 空はこわしな／夕たちの音
71 寝くらへもいなぬは／いかにすくみ鷺
72 よしのはしろし／雪のふるぬま
73 うつし絵はさも／あり〳〵と書なして
74 また見ぬ人を／なせにこひかせ
75 おもひのみしるへを／せよとくときこと
76 たんたなみたの／雨はさきたつ
77 あわてもとるうさや／つらさを花もしれ
78 しのふ関所は／長閑ならさる
79 袖かすむにせ／山伏となりけらし
80 問とこたへぬ／かつらきのさた
81 おんひんにちはや／ふる城こしらへて
82 いつれこゝろの／有しさふらひ
83 侘れともそたち／しらるゝ爪はつれ
84 きみか持ぬる／駒の見事さ
85 待請てうらみは／さつとわすれ草
86 秋になす〳〵／すてもせぬ中
87 ともすれはりんきを／ふかくゆふ月夜
88 たれもたしなむ／直きこゝろね
89 たて置し札の／おもてをとくと見よ
90 やかてはしまる／うれしのう〳〵
91 めせやめせもはや／祭もわたしふね
92 風にならふか／磯のさゝ波

（三ウ終）

（四オ終）

93 けふはかり逗留を／せむ旅の宿
94 ことかりそめに／なしむうかれ女
95 誰とてもなけの情に／たらされて
96 年のよる迄／つとむ奉公
97 出頭は次第〳〵に／つのり来て
98 広〳〵となる／一家一門
99 時を得て花そ／ひらける樽肴
100 保つ寿命は／長き日の影

御神前法楽連歌
誹諧如意満足
［四ウ白紙］

（四オ終）

【G―2】
寛文拾弐年十一月十五日
賦何人連歌

1 神を祝ふまことなる／代の時雨哉　昌宣
2 心もさゆる／月の御社　讃清
3 言の葉はよむに／真砂も数たらて　安積
4 汀にあさる／とり〳〵のあと　森信
5 芦原のなひくや／塩のみちくらし　俊行
6 浪路をいそく／ふねもよひせり　正次
7 行末もはるか／なりける首途に　延貞
8 いつかへりこむ／九重の空　正俊
9 家をはなれ心や／人にそひぬらん　盛氏
10 難面とても／夢はみるらめ　正好
11 かくはかり月に／宿かす袖ぬれて　勝興
12 秋になさるゝ／身社つらけれ　執筆
13 荒小田やかり／のこしたる爰かしこ
14 住わひつゝも／所かへ行
15 一すしにおもひ／入ぬる高野山
16 法のなかれの／玉川の水
17 駒とめて詠／につゝく花の陰
18 さなから春を／薗にしめをく

（五ウ終）

19 朝霞たつや／四町のいかはかり
20 あたし其名は／人わらひ草
21 過かての衣の／香こふるいやはかな
22 もとむ鶴寸に／文かきてやる
23 わするなよ雲井／へたてぬ月の友
24 なからへて経る／須磨のうき霧
25 はたさむみ明石／かねたる夕〳〵へ
26 旅の長居／はいつを都としも
27 唐土やまなひの／道にとめよりて
28 さとりの窓を／ひらかむとこそ
29 雪の中に立は／殊勝ぬ心なり
30 うつるひかりの／春にちかかる

（六オ終）

31 事かわるけふと／いふ間に飛鳥川
32 唯つねならぬ／夜半そみしかき
33 郭公一声／きけは明はなれ
34 雲引すてし／雨の名残に
35 花を待袖の／盞くみそへて
36 梅をかさしの／舞は八千度

御神前法楽歌仙／一座皆令満足
荻原作左衛門昌宣　三輪忠兵衛延貞
玉木善之丞讃清　住山吉左衛門正俊
西川小兵衛安積　河辺喜太良盛氏
倉品七良左衛門森信　松田藤左衛門正好
今井六右衛門俊行　吉川金兵衛勝興
大和伝右衛門正次

（六ウ終）

【付記】貴重な資料の閲覧・および翻刻の御許可を賜り、社伝等についてご教示を賜りました深志神社宮司　牟禮仁氏にあつく御礼申し上げます。また、勢田勝郭氏より連歌について貴重な御教示を賜りました。記して深謝申し上げます。なお本稿は、JSPS 科研費17K02447による成果の一部である。

（二〇二〇年十月三十日受理、十一月十一日掲載承認）